

## アルコール・薬物依存症の思春期発症と当院の治療成績

根本忠典<sup>1)</sup> 伊藤恵理<sup>1)</sup> 奥村弓恵<sup>1)</sup> 太田健介<sup>2)</sup> 太田耕平<sup>2)</sup>

1)心理士 2)医師

医療法人耕仁会札幌太田病院

**【はじめに】**1980年代は、中学・高校生年代のシンナー乱用が頻発した時期であった。その要因に、家庭・学校の機能不全、非行的背景などがみられた。近年は、不登校・アルコール(以下AL)・眠剤依存、自傷行為、摂食障害、大麻・覚醒剤依存など症状が多様化した。今回の調査では、薬物乱用者の半数以上が思春期から発症し、最終学歴は高卒以下が73%だった。児童期、思春期からの予防が重要である。当院では、1974年からAL・薬物依存の治療に十段階心理療法(含む内観)を実施。2008年に当院を退院したAL依存症100例の1年予後調査では、断酒率56%だった。同年、更にSMARPP-Jr(松本俊彦他、改訂第2版2009.1)を用いたAL・薬物依存認知行動療法(以下CBT)を導入した。今回、CBT導入後の調査結果を報告する。

**【対象、方法、結果】**2008年3月～2011年9月に当院でCBTを受けた受療者19名(男性7人、女性12人)に、自作の調査票を用いて電話・面談で聞き取り調査を行った。調査項目は、再発の有無、就労状況など。治療プログラム(ピア・サポート、内観療法、家族療法、デイケア、就労支援、共同住居など)の一部としてCBTを導入した。調査の結果、処方薬依存の約半数がAL乱用・依存を併発していた。修了後6ヶ月以上の予後調査では、断薬・断酒群は68%、再発群6%、不明群は26%だった。

**【考察】**CBT前後のアンケート、予後調査の結果から、病識向上、認知修正、断酒・断薬の決意強化など、CBTの有効性を認めた。また、従来からの内観療法、家族療法による対人関係改善とデイケア、就労支援施設、共同住居、自助会など、退院後の支援による相乗効果が得られたと考える。思春期症が、その後の人生に与える影響を再認識し得た。

**【参考文献】**太田耕平他、うちの子に問題はないか、北海道新聞社、第1版1984、第2版2012